

中国宋代士大夫の美意識に関する史的研究
一書の鑑賞および題跋執筆を事例として一

学生番号：D040182

氏 名：津坂 貢政

【論文要約】

本論は、中国宋代の書の作品に対する鑑賞者の評価の内容を分析の主たる対象とし、そこに投影された士大夫の美意識を社会史的手法によって考察するものである。

本論にいう「美意識」という言葉は、当時の文藝の主體的担い手であった士大夫が、作品に鑑賞者として向きあう際に政治的・社会的・思想的な要素が絡み合うなかで形成する評価の価値基準と、それにもとづく作品に対する感応を意味するものとして用いている。

西暦 10 世紀に始まる中国宋代において、官吏登用のための方途として本格的に採用された科挙は、それより以降、清代末期にいたるまで約千年のながきにわたり機能し続けた。その科挙に合格することによって支配階層を構成した士大夫は、王朝の治政に与る官僚であり、またそれにとまなう税や労役の免除といった特権・権益によって経済的にも優遇された存在であった。

それと同時に士大夫たちは、当時の詩文書画といった文藝に関しても、これを主導する立場にあった。つまり、宋代以降の前近代中国社会において、文藝文化は彼らによってほぼ寡占化されていたわけであるが、こうした基本構造のもと、士大夫のつくったものを士大夫が論評するという鑑賞の場においては、彼らに特有の美意識が開陳されることになった。すなわちそこでは、作品は作り手の士大夫としての人格が写しこまれたものと見なされ、その是非こそが、可視的な作品の巧拙などよりも優先されるべき評価の対象とされていたのである。

このような士大夫による文藝評価の特性に着目し、本論では教養・実用の両面から士大夫にとっては最も親近性のあった書の評価に観察の焦点をしばり議論を展開する。本論の主要な論題としては次のような点があげられる。

まず一点目として、本論で扱う時代的な範囲は宋代が中心となるが、このいわば「士大夫の時代」の始まりの時期を生きた士大夫たちは、自らを士大夫としていかに生き、振る舞うべきであると思念していたのかを検討する。これを書の論評という文藝批評の言葉のなかから読み取ろうとするとところに本論の特色がある。

二点目に、宋代の士大夫が彼らの美意識に照らして、どのような書を良いものとして

評価したのかを解明する。とくに宋代の場合、書に対する美意識には、北宋と南宋とで相違が見られるが、本論では、その相違が生ずる歴史的過程を追跡しながら、北宋と南宋の士大夫それぞれの美意識の葛藤・せめぎ合いの様相を描き出す。

これら二点に関しては、本論では宋代という時代を一括りにせず、北宋と南宋の性質の違いを重視し両者を区別して対比的に分析する。その際、それぞれの代表例として前者では欧陽修・蘇軾を、後者では思想家として著名な朱熹をとくに取りあげる。この方面の研究においては、前者についてはこれまでも少なからぬ論及があるが、後者についてはほとんど蓄積が無い。後世の中国社会は言うに及ばず、広く東アジア地域にまで影響を及ぼした「朱子学」を想定し、朱熹の美意識に注目することは、本論の画期的な点として強調してよいものと思われる。

最後に三点目としては、一点目と二点目の問題にアプローチするための具体的な史料として、鑑賞者が文物などを鑑賞した際にその感想を書き留めた文章である「題跋」を活用することがあげられる。この「題跋」は、とくに歴史研究の現場では十全に利用されてきたとは言い難い史料であるが、本論ではこれを全面的に取りあげ使用することで、その歴史史料としての可能性を提示する。

以上の観点と史料にもとづくことで、本論の各章では以下のような議論がなされる。

まず第一章は、これまで宋代の代表的能書家として蘇軾・黄庭堅・米芾の三者の名があげられることは常であったが、彼らがなにゆえ能書家としての力量を身に付けることが出来たのかという点に言及した研究が皆無であったことを受けて、彼らの具体的な学書の様相を見る。学書の要諦は、その手本となる名跡の法帖を観察し臨書することからはじまるが、宋代においてはそうした法帖の類を目にする機会は万人に開かれたものではなかった。能書家としての修練を積むためには、この法書に触れる機会を確保することがまず何よりも重要であったが、当時においては品質の高い法書を目にするのできる機会は甚だ稀少であったし、みずから入手しようにも、それはきわめて高価なものであった。こうした環境のなかにあっても、蘇軾・黄庭堅・米芾らは、上質な法書を目にする機会を官職上の特権や人的繋がりを駆使して獲得していたことを明らかにし、しかもその際に彼らは魏晋期の貴族の書を重視していたことを指摘した。

第二章では、宋代における書の評価をめぐる美意識には、大きな二つの極が存在していたことを強調して論じる。その一方は先行研究が注目してきたもので、蘇軾に典型的であるように、自身の心の情感の趣に素直にしたがい、そこから生じる独創的な個性の表明を重視する「外向型」とでも言うべき美意識であった。しかし、その一方には、厳然として朱熹に代表されるような、あくまで古典の規範に忠実であることを旨とし、心の涵養と自制的秩序を重視する「内向型」とでも呼ぶべき美意識が存在した。つまり、

従来の研究のように、おおむね前者をもって宋代の美意識の特徴を一辺倒に論じることは適切ではなく、宋代には対照的な二つの美意識が明確に存在していたことが重要であることを指摘した。そして最後に、この二つの美意識が、後世の士大夫たちに各様に継承・解釈されていったことから、宋代とは以後の時代の士大夫たちが書、ひいては士大夫文化全般について論じる際に依拠する基本的な参照枠が提示された時代であり、原点として立ち戻るべき美意識の祖型が形成された時代でもあったことを述べて展望とした。

第三章は、第二章の補遺としての役割を担う。ここでは、朱熹が北宋士大夫の一人である蔡襄の書を高く評価したことに着眼し、朱熹が蔡襄の書のどこに魅力を感じ、これを称賛していたのかを、彼の書に関する時代観から考察する。そこでまず、同じく蔡襄の書を高く評価していた北宋の欧陽修・蘇軾の事例を検討すると、彼らは唐代の書を直接的な憧憬の対象とし、宋代の書はそれに比して劣ったものであると考えていた。しかし、そうした悲観的ななかにも蔡襄は傑出した書人として評価されており、そこには宋代の書の行く末を蔡襄に託そうとする彼らの嘱望の念が読み取れる。これに対し朱熹は、三国魏の鍾繇や東晋の王羲之の書風に好意を持っていたことがわかる。朱熹は南宋士大夫の一人として、とくに王羲之に対しては、その書とは別に、江南の六朝文化を象徴する人物としての敬意や、北半を異民族王朝に奪われた政権に仕え同じ境遇を味わった士大夫としての共鳴を抱いていたことが推察される。朱熹は蔡襄の書を三国や六朝の書風をよく継承したものとして高く評価するが、その背景には、こうした南宋士大夫としての朱熹の美意識が作用していたことを論じた。

続く第四章では、三章に続いて朱熹が蔡襄の書を高く評価した要因について分析する。ただしこの四章では、その重要な要因として、蔡襄の書そのものの魅力の他に、彼の官人としての功績があったことを指摘する。朱熹にとって官人としての蔡襄は、まずもって北宋の慶曆新政において名を馳せた理想の士大夫であったが、それだけではなく、朱熹は福建という地域社会を介して蔡襄に共感するおもいがあった。すなわち、蔡襄と朱熹はともに福建を郷里とし、またともに福建を任地とし、しかもその地に儒教的な生活倫理を扶植しようと腐心した地方官でもあった。つまり、こうした生育と地方官活動の二重の地縁による親しみと敬慕の感情が、朱熹による蔡襄の書への高い評価を招来する一つの要因であったことを指摘した。

第五章では、題跋の中でもとくに故人の生前の履歴を記した行状や墓誌銘などに付されたものを伝記題跋と称して注目する。朱熹の文集に所収の題跋二八〇条のうち、伝記題跋は二〇条が確認できるが、それらを検討してみると①朱熹が目にした伝記はすべて宋人のものであること、②題跋の依頼者は概ね朱熹の縁戚や友人・知人、もしくは門人

などであること、③伝記題跋の執筆は、朱熹 50 歳以降に集中していること、などが判明する。かかる諸点を踏まえ、題跋本文はもちろんのこと、題跋が付されている伝記そのものや、朱熹以外の人物による題跋についても並行して分析し、それぞれの伝記題跋が書かれるにいたった朱熹を取り巻く当時の政治的・思想的環境を浮き彫りにし、さらに南宋期の道学系士人の人脈内で交わされる題跋の執筆と回読にいかなる意義があったのかということについても考察する。その結論として、①朱熹による伝記題跋は、彼が道学の思想家として広域的な声望を獲得することにより依頼を受けて執筆されたものであったこと、②そこには、同世代の中核的道学系士人が世を去るなかで、生き残った朱熹が自覚的に道学を顕彰し、また自身の学を他の学から差異化し主張しようとする意図が込められていたこと、③そのための媒体として題跋が機能したこと、などを指摘した。

以上をとりまとめ、本論の結論として大きく三点をあげておきたい。

まず一点目として、士大夫の文藝批評において、何よりも優先される評価基準は、その作者の士大夫としての人格であり、このことはすでに北宋ごろから芽生えたものではあったが、その尖鋭化は南宋の朱熹によってなされたものと考えられる

ただし、二点目として、士大夫としての人格を重視しつつも、宋代においては、北宋の蘇軾に典型的な作家の個性の表出を尊重し、老荘思想的・外向的性格を帯びた美意識と、朱熹に代表的な古典の筆法の墨守を重視し、儒教原理主義的・内向的性格をそなえた二つの評価の基準が存在した。先行する研究では、宋代士大夫の美意識は前者のみが強調されてきたが、本論はこれを批判的に継承して、北宋と南宋に立ち現れた上記の二つの美意識が並存・拮抗する関係にあり、これが以後の士大夫の美意識の参照枠として、後世にまで継承・解釈されるものであることを強く主張する。

三点目に、後世において、しばしば朱子学の美意識は、その思想内容とともに禁欲的・抑制的一面をもって論じられる傾向にあるが、本論が具に論じたように、本来の朱熹自身の美意識のなかには、「個性」の表出と「法」の墨守の調和を尊重する面や、地域社会に生きる士大夫としての生き方を反映したものがあったことは看過されてはならない。本論は、つとめて宋代に生きる士大夫の視点に寄り添った考察を心がけ、宋代士大夫の美意識の原点には、以上のような多様な価値意識が存在したことを浮き彫りにした。

ただし、士大夫の時代は、宋代のち千年ちかく続くものであり、その間において宋代に胎動した美意識が、いかに継承されていたのか。元・明・清代へと続く様相のさらなる考察は以後の課題として残った。また、朱熹の美意識については、その後のいわゆる「朱子学」の定着と流布にともなう中国本土、あるいは朝鮮・日本・ベトナムへの影響など検討されるべきことがらは、なお多いがそれも発展的課題としておきたい。